

2 志波城跡と周辺遺跡の土器様相

(1) はじめに

東北地方の古代土器の編年が、宮城県を中心になされてきたが、各地での発掘調査の増加にともない、各地ごとの土器文化が次第に明らかになり、地域単位の編年の必要性が高まってきた。岩手県内においては、おそらく南北3地域での編年が必要と考えられ、盛岡地域はその中央に位置するであろう。

小地域単位に土器様相がちがいが、編年が可能であるということは、とりもなおさずその土器を生み出した文化的環境に地域性があることを示している。したがって、文化的環境の地域性を理解するには、まず小地域の土器様相を既知の時間軸の中でとらえ、そして、その様相がどのような空間的ひろがりや時間的つながりをもっているのかを検討することであろう。本章では、志波城跡の土器様相を現時点でまとめ、その時間的位置を明らかにして、周辺遺跡の土器様相、とりわけあかやき土器に表徴される盛岡地域の特性に言及しようと思う。

なお、志波城跡の土器群は、調査の比較的すすめられた内城地区からの出土は少なく、郭内に分布する竪穴住居跡から多くの出土をみている。特に郭内西部を南北に走る東北縦貫自動車道用地内の調査（第1・2次調査）では、163棟を検出し、うち72棟を精査して多数の資料を得ているが、それらは略報や現地説明会資料で概要が報告されているだけで、細部について吟味できる段階にない。本稿では公表された資料に限定して稿をすすめていきたい。

形態の分類基準

まず土器区分からのべたい。これまで須恵器と土師器とに区分されてきた土器の中に、須恵器でも土師器でもない無釉の土器群が明らかに存在することが近年明らかになってきた。この無釉の土器群を筆者らは「あかやき土器」と呼んでいる*。あかやき土器は、須恵器の成形、調整技法を踏襲しながらも、土師器のように酸化焰で焼成された土器である。坏類は、環元焰焼成のものを須恵器、酸化焰焼成内黒処理のものを土師器、そして酸化焰焼成でも内面調整を施さないものをあかやき土器と、容易に区別することができる。甕類も酸化焰焼成のものが土師器とあかやき土器に区分されるはずであり、筆者はロクロ非使用の甕類を土師器、ロクロ成形甕類をあかやき土器とみている。

甕類をロクロ使用の存否により区分することには異論も多いと思われるが、ロクロ成形甕の多くがあかやき土器坏の胎土、焼成、色調に似ており、調整も坏と同じく須恵器の技

土器区分

* あかやき土器の呼称は、一般に酸化焰焼成の土器をすべて含むが、本稿では、古代の土師器以外の酸化焰焼成の土器に限定して用いる。なお適切な用語ではないので、いずれかきかえたい。

法と基本的には変わらない。そしてまた、ロクロ未使用の段階からロクロ成形に完全に移行する段階までの間は、ロクロ非使用とロクロ成形の甕類が長期間共存しており、土師器製作者が数世代にもわたり、両者の甕を併行して製作していたとは考えられない。坏類のようにロクロ未使用からロクロ成形への移行が短期に行われ、共存する場合でも過渡的様相として表われているのと対照的である。

このように、あかやき土器は須恵器の成形・調整技法と土師器の焼成技法を踏襲しながらつくられた土器であり、その新たな技法は坏類ばかりでなく甕類も製作対象にしていたと考えられるのである。このことについては後述する。

形態分類

次に形態および形状の分類基準についてのべたい。なお坏類などの分類を明確にするため数値を使用した。これは1個体ごとの法量を図上にドットして得られた数値である。

坏類は、坏・皿・盃・埴・大形坏に分類される。皿は坏より器高浅く、盃は坏よりも口径の小さいそば猪口様のものである。大形坏は坏を大きくした井様のもので、埴は大形坏の外傾のきつい形態である。これらのそれぞれの用途は不明であるも、法量的にそれぞれまとまっており、製作者が意図した形態——器種であると考えられる。

坏は、その器形から直線的なたちあがりをもつA類、体部全体が内湾し口縁部も内湾するB類、口縁部が外反するC類に大きくわけられる。また法量から底径の小さなI種(4.5~7.0cm)と大きなII種(7.0~9.5cm)とにわけられる。なお坏の口径や器高は、その数値のみで分類しうほどの意味はなく、外傾度として総括的に扱う方が効果的である。外傾度は、 $\text{器高} \div \{(\text{口径} - \text{底径}) \times \frac{1}{2}\}$ で計算される。また体部下端から底面にかけて、ロクロ台から切りはなした後再調整するものもあるが、その部位は右図のとおりである。この再調整にはロクロでけずる回転ヘラケズリと、静止状態で不定方向あるいは一方向にヘラ

第12表 土器形態分類表

	形 態	器 高	口 径	底 径	外 傾 度
		cm	cm	cm	
坏 類	盃 蓋	—	合口部 9.0~12.0	—	—
	坏 蓋	—	12.0~15.0	—	—
	埴 蓋	—	15.0~20.0	—	—
	坏	3.5~ 6.0	12.0~16.0	4.5~ 9.5	1.0~ 2.0
	皿	2.5~ 3.5	12.0~16.0	4.5~ 9.5	~ 1.0
	盃	5.0~ 7.0	9.0~12.0	5.5~ 7.5	2.0~
	埴	6.0~ 8.0	15.0~20.0	7.5~12.0	1.5~ 2.0
	大形坏	6.0~ 8.0	15.0~20.0	7.5~12.0	1.0~ 1.5
甕 類	小形鉢	器高<口径	12.0~20.0	—	—
	鉢	器高<口径	20.0~27.0	—	—
	小形甕	12.0~25.0	12.0~20.0	—	—
	長胴甕	25.0~40.0	20.0~27.0	—	—
	小形壺	15.0~25.0	15.0~20.0	—	—

- * 1 原則的にはロクロ成形土器に適用する。
- * 2 坏類のうち、数値が複数の形態にまたがる場合はすべて坏とする。
- * 3 高台のつくものは、台を除いた法量で分類する。
- * 4 これらのほかに、盤・瓶などもみられ、また鉢なども細分される。

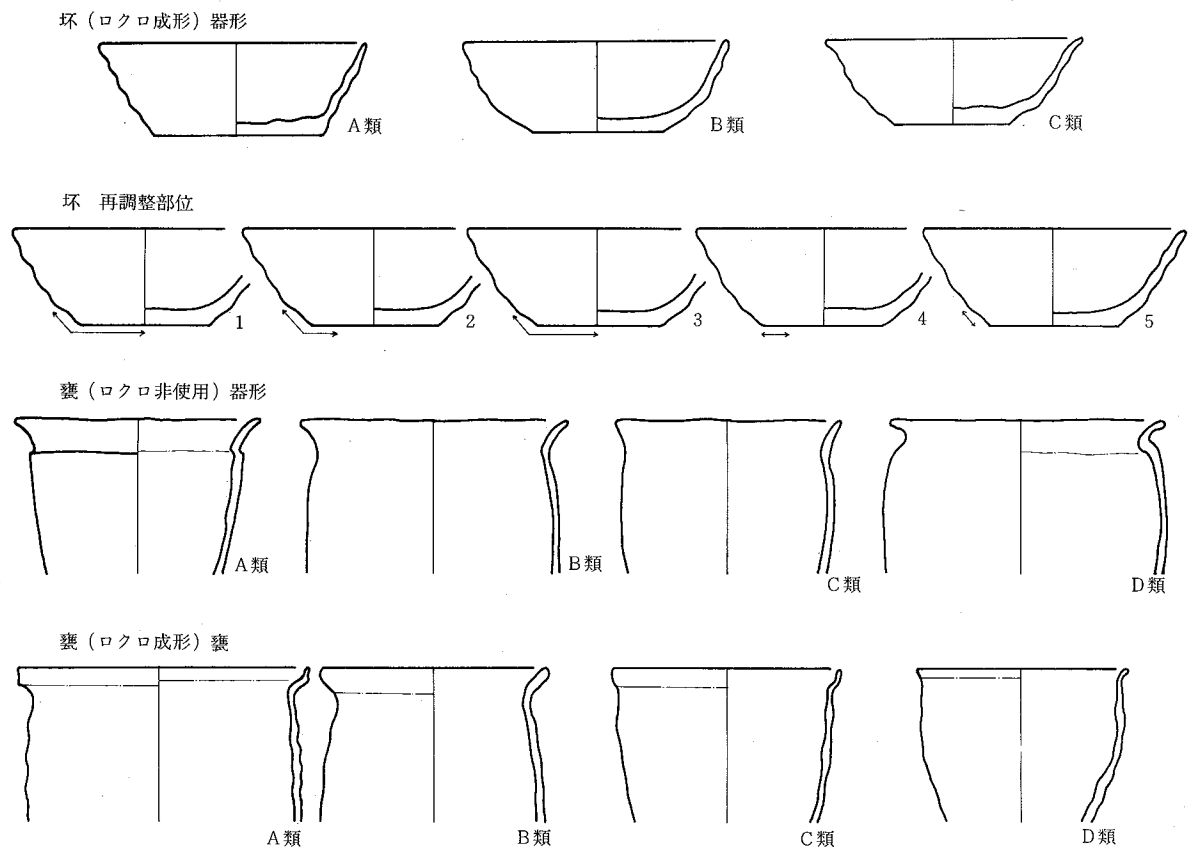
ケズリする手持へラケズリがある。共に胎土内の砂の移動が観察される。

蓋は、当然それをのせる坏類が必要であり、合口部の径により、盃蓋・坏蓋・埴蓋に分類される。それぞれの坏類に合致する口径をもつものである。ただし坏蓋の口径は、坏、皿、台付坏（稜埴）に合致し、埴蓋は埴・大形坏・台付埴・台付盤に合致し、どれとセットになるか確定できない。

第12表はロクロ成形土器に限るが、ロクロ非使用の甕は小形甕（器高12.0～20.0cm口径12.0～15.0cm）、長胴甕（器高25.0～40.0cm口径15.0～27.0cm）におおよそ分類できる。胴張形のものも甕とした。口縁部の形状から、ロクロ未使用段階から残存する頸部に段を有するA類、段をもたずに外反するB類、ゆるやかであまり大きく外反しないC類、口縁部が短かく外反するD類、に分類される。

ロクロ成形のあかやき土器甕類も、口縁部の形状により、外反し口唇部を上方につまみあげるように挽き出すA類、単に外反するB類、外反し口縁上半が直口気味にたちあがるC類、短かく外反するD類に分類される。A類はさらに挽き出しの強いものと弱いもの、また下方に大きく屈曲させるものなどがある。B類にはゆるやかに外反するものも含めた。C・D類は主に小形甕によくみられる形状である。

なお須恵器甕類は、計測可能なものが少ないので、法量ははっきりしないが、大形の大甕と中形の甕とに分類できそうである。



第37図 土器器形分類

(2) 志波城跡の土器様相

坏類

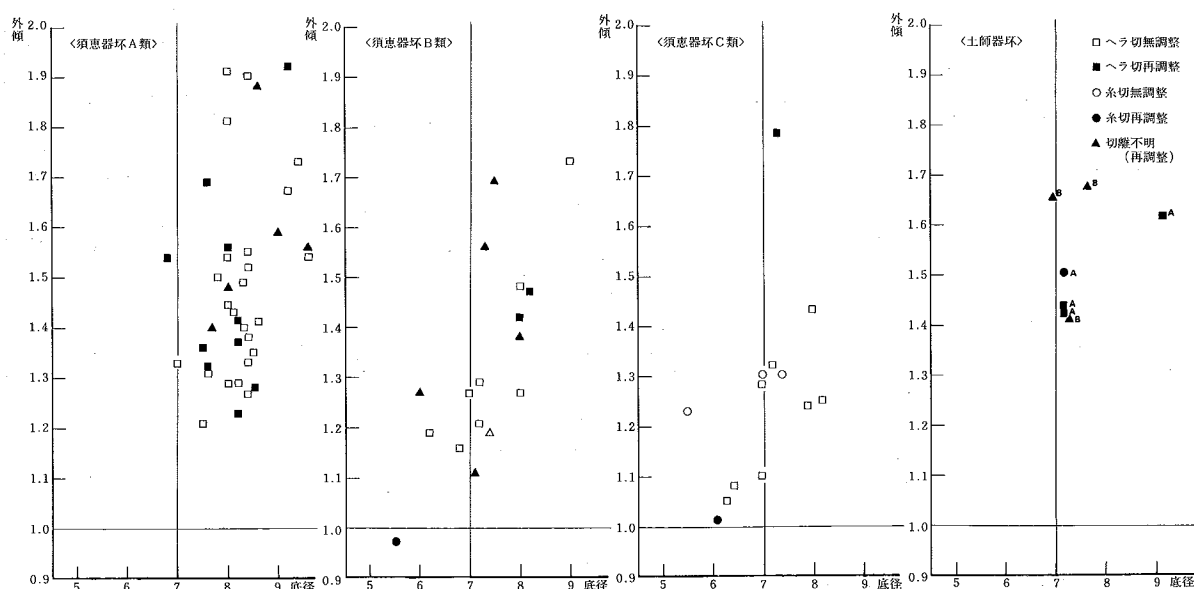
坏類は、須恵器およびあかやき土器が圧倒的に多く、全体の9割弱を占め、残り1割は土師器である。須恵器とあかやき土器の比率ははっきりしないが、概ね3:1になるようである。したがって坏全体のうち須恵器は3分の2を占めることになり、一般集落との差を示している。また内城地区からは、土師器、あかやき土器の破片はみられるも、ほとんどが須恵器であり、須恵器の使用率が他より高くなっている。

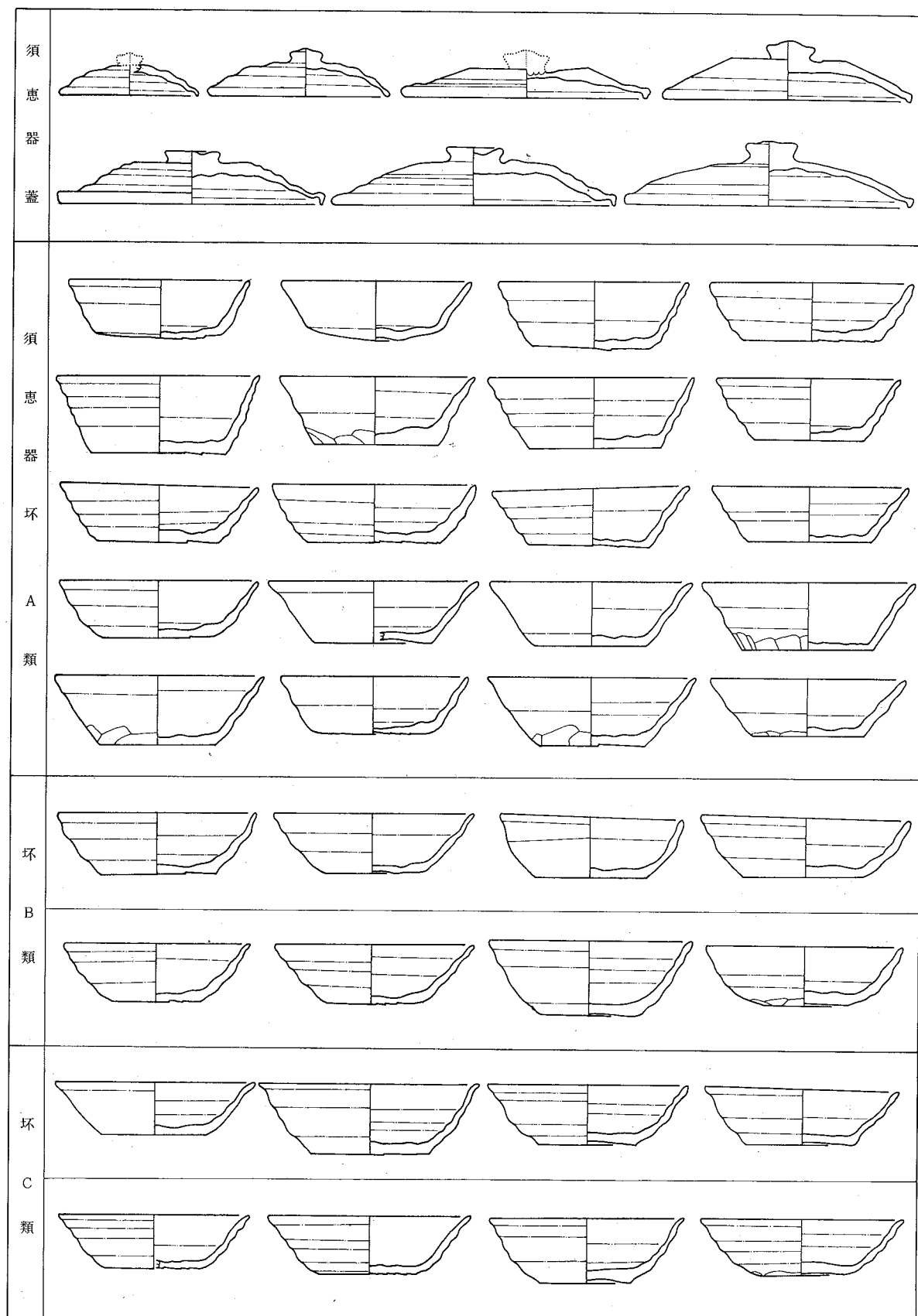
須恵器坏

須恵器とあかやき土器とは、器形や底部切離し技法に差がほとんどみとめられないこともあり、一括してのべたい。須恵器（あかやき土器）坏の器形的特徴として、底部から口縁部まで直線的にたちあがるA類が半数以上であり、口縁内湾のB類が4分の1を占め、口縁外反するC類は少ない。そのC類もゆるやかな外反である。法量的には底径の大きなI種（7.0～9.5cm）が9割近くを、その中でも外傾中程度（外傾度1.2～1.6）が大半を占める。特にA類はI種のみで、外傾も他よりきつく、外傾度1.6以上の坏も少なくなく、後で比較するように、本遺跡の特徴となっている。またA類からC類に進むにつれ、底径の小形化と外傾の弛緩化の傾向が認められる。

須恵器（あかやき土器）坏の底部切離し技法は、ヘラ切りが4分の3を占めている。糸切りは1割でほとんどがC類であり、A・B類では明かな糸切はきわめて少ない。グラフに示した個体以外も含めて体部下端や底部の再調整は約半数の坏にみられる。調整部位は体部下端から底部全面または周縁にかけて施されるものが最も多く、底部のみ、体部下端のみ、は多くない。また、技法は手持ちヘラケズリが回転ヘラケズリをわずかに上回っている。

第13表 志波城跡出土坏類





第38図 志波城跡出土須恵器蓋・坏（1：4）

志波城跡の坏類のうち圧倒的な量の須恵器（およびあかやき土器）坏は、体部が直線的にたちあがるA類が多く、また底径が大きく、さらにヘラ切が主体を占め、再調整も約半数に施されるという特徴をもっているのである。

土師器坏

これに対し、内面をヘラミガキし、黒色処理する土師器坏は量的にも少なく、ほとんどのロクロ成形の坏に再調整を施している。底部切離しは、半数が再調整のため不明であるが、ヘラ切と糸切がほぼ同率である。また器形的には一定しないが、底径7.0～8.0cm、外傾1.4～1.7と法量的にややまとまりをみせている。形状もA類かB類に限られ、C類はみられない。

ロクロ未使用の坏も数点確認されている。丸底で、体部中央に明瞭な段をもたず、内面をヘラミガキ、体部外面をヘラケズリするものである。ただしこれらの出土状況は注意される。脚の短い高坏脚部が内城建物跡から出土しているほかは、城柵築営以前の遺構出土（SD572・SI011）であったり、住居跡のかまどそで（GI09・EC62住）などからの出土であったりするからである。第14・16次調査では、城柵築営以前の堅穴住居跡も検出されており、ロクロ未使用の坏が、築営後に製作使用されていた可能性は低いようである。

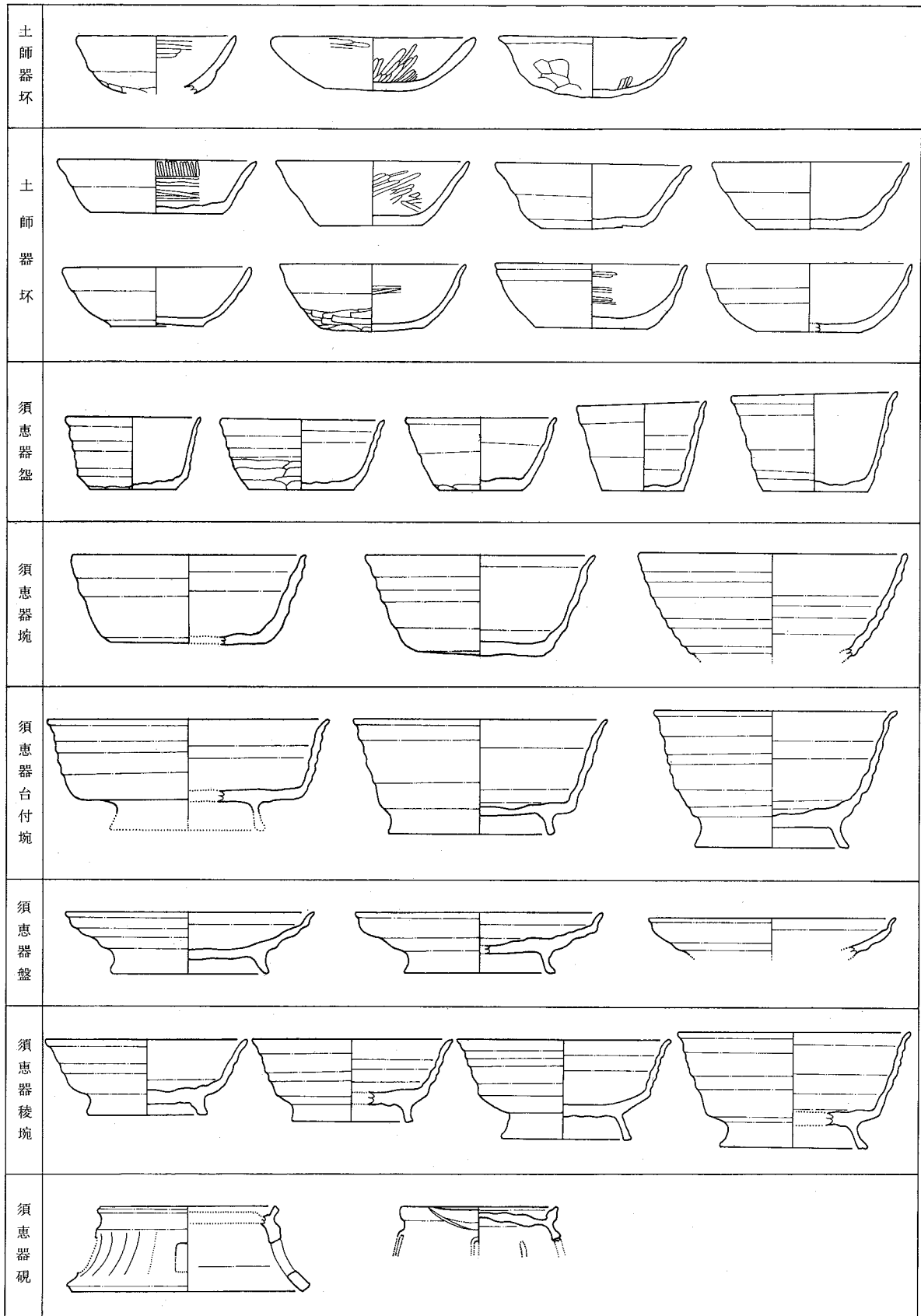
須恵器坏類

他の須恵器（およびあかやき土器）坏類は量的に多くない。皿はほとんどみられず、盥・埴も少ない。盥は、体部が直線的にたちあがる器形が多く、体部下端に稜をもつものもみられる。体部下端から底面にかけては、回転～手持ヘラケズリの再調整がなされており、坏とはほぼ同じ技法である。

この盥と対をなす小口径の蓋もある。埴は法量的なまとまりがみられないが、ヘラ切無調整や手持ケズリのものもあり、坏と変わらない。口径が埴と対をなす蓋もある。この埴蓋は、肩の断面が直線的で稜線の明瞭なものと丸味をもつものとがみられ、量的には前者が少ない。共に宝珠様のつまみを有している。また、口縁部の屈曲の深いものと浅いものがあるが、肩部の形状と相関しない。ロクロ成形後の再調整はすべて回転ヘラケズリであるが、天井部から体部上半にかかるもの、天井部のみのもの、体上半のみのもの、また全く調整しないものがあり、肩の明瞭な蓋には天井部から体部上半にかけての再調整がみられるが、丸味をもつ蓋では一定していない。なお坏の口径に対応する蓋は出土していない。

高台を付す坏類には、台付坏(稜埴)、台付盤、台付埴がある。台付坏は体部下半に大きな屈曲部をもついわゆる稜埴である。体部は直線的にたちあがり、口縁部が外反する。再調整は、体下半の屈曲部下を回転ケズリし、高台を付した後、底外面を回転ケズリするが、再調整を施さないものもみられる。台付盤とした器種は、皿よりも口径が大きい。底面から体部まで明らかな境をもたずにゆるやかにたちあがり、口縁部で大きく屈曲するものである。この特徴は、他の坏類や台付坏類にみられず、また高台の付かない盤だけの器形もない。台付埴は1個体ごとに器形差が認められる。これらも基本的に坏と同じ技法によってつくられているものである。

このほか、容器以外のものとして円面硯がある。これには、土師器やあかやき土器は使われず、須恵器ばかりである。なおあかやき土器を除く須恵器坏類には、自然釉のかかるものはほとんどなく、褐灰色（くすべ色）のほかに灰白色や橙色を呈するものも少なからず存在し焼成的にはあまきがある。

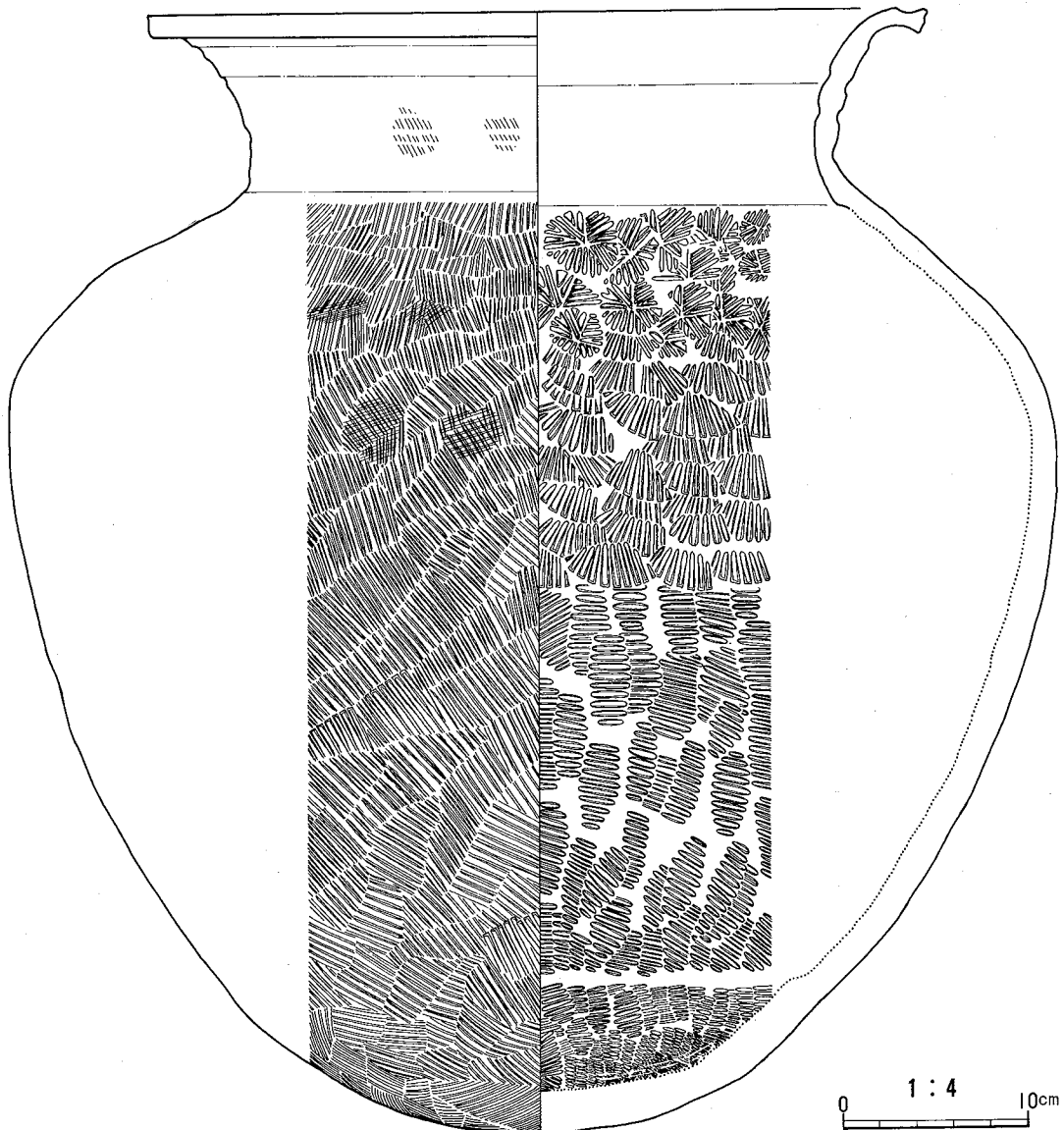


第39図 志波城跡出土土師器・須恵器・坏類（1：4）

甕類

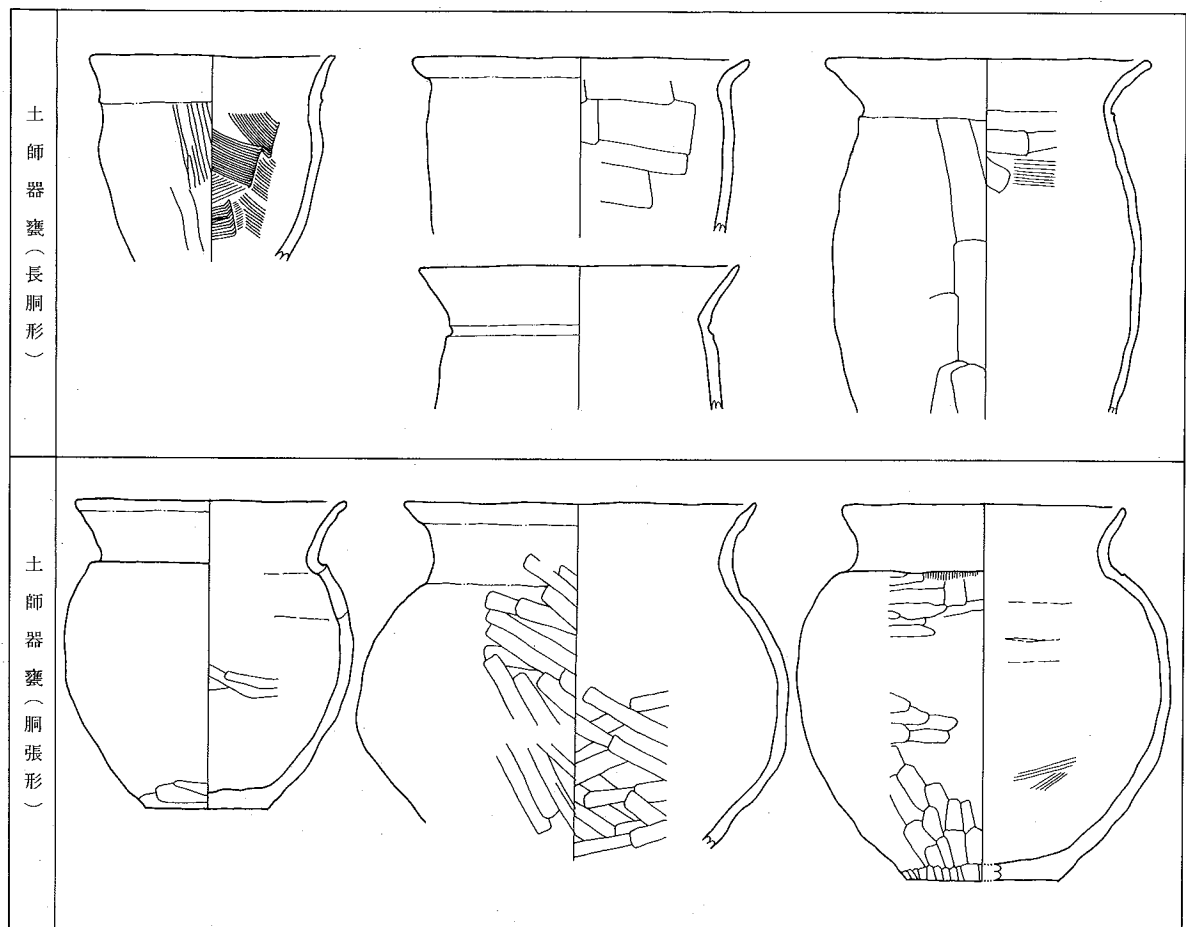
須恵器大甕

くすべ色を呈する須恵器甕類は、1926年に外郭東辺北部で耕作中に出土した大甕がはっきりしているだけで、あまりよくわかっていない。この大甕がどういった遺構に伴うものか不明であるが、器高60.5cm口径42.0cmで丸底である。体部外面を平行叩き、内面上半を蓮藕文^{れんぐうもん}、下半を平行あて工具でたたきしめ、口縁部のみをロクロ成形する(第40図)。このあて工具は径6.5cmの円筒形で端部に蓮藕文^{れんぐうもん}、体部に平行文を刻んだものである。このほかの大甕は小片ばかりであるが、体部外面の平行叩き、内面の青海波や平行あて工具がみられる。



第40図 志波城跡出土須恵器大甕

ロクロ非使用の土師器の甕類には長胴甕と胴張甕とがある。長胴甕は口縁径が体部径より大きいのが一般的であり、胴張甕は、体部中央付近に最大径を有する。胴張甕よりも長胴甕の量が多いが技法的に両者の差はほとんどない。口縁部形状も頸部に段を有するものと単純に外反するものとが共存し、後者が主体を占める。口縁部に数条の沈線をめぐらすものはみられず、頸部の形式的な段をもつものも少ない。また短かく外反するものはみられない。調整は、口縁部内外をヨコナデし、体部外面をケズリやヘラナデで、内面をハケメやヘラナデ調整している。底部は不明である。



第41図 志波城跡出土土師器甕

あかやき土器甕

ロクロ成形のあかやき土器の甕類には、小形甕、甕、鉢がある。小形甕は出土量も少ないようである。底部切離しはへら切りのものが数点みられており、さらに体部下端のみ、あるいは下端から底面まで手持ちへらケズリしている。口縁部形状は、「ノ」の字状にたちあがるか、外湾し、口唇が短かくひき出されるものはみられないようである。

甕は長胴甕で、最大径が口縁部にある。口縁部形状は、直線的に屈曲する頸部をもち、口唇部を上方に短かくひき出すものが多く、単純に外反するものがそれに次いでみられる。「ノ」の字状にたちあがるものや短かく外反するものはないようである。調整は、口縁部外面はロクロ目だけのものが多いが、平行タタキ目を消すロクロ目のものもみられる。体部外面も、ロクロ目だけあるいは平行タタキの後のロクロ目のものとがあり、その後に体部下半をへらケズリしている。すなわち輪づみ→タタキ成形→ロクロ成形→へらケズリという過程で製作されるのであるが、タタキ目のないものやへらケズりされないものもある。口縁部内面の調整は、ロクロ目だけのものが多いが、中にカキメの施されるものもある。体部内面はへらナデである。

鉢などの器種は少なく、ロクロ成形のみの鉢上半がみられるだけである。口縁部は折りがえしたように肥厚する。

土器群の共存性

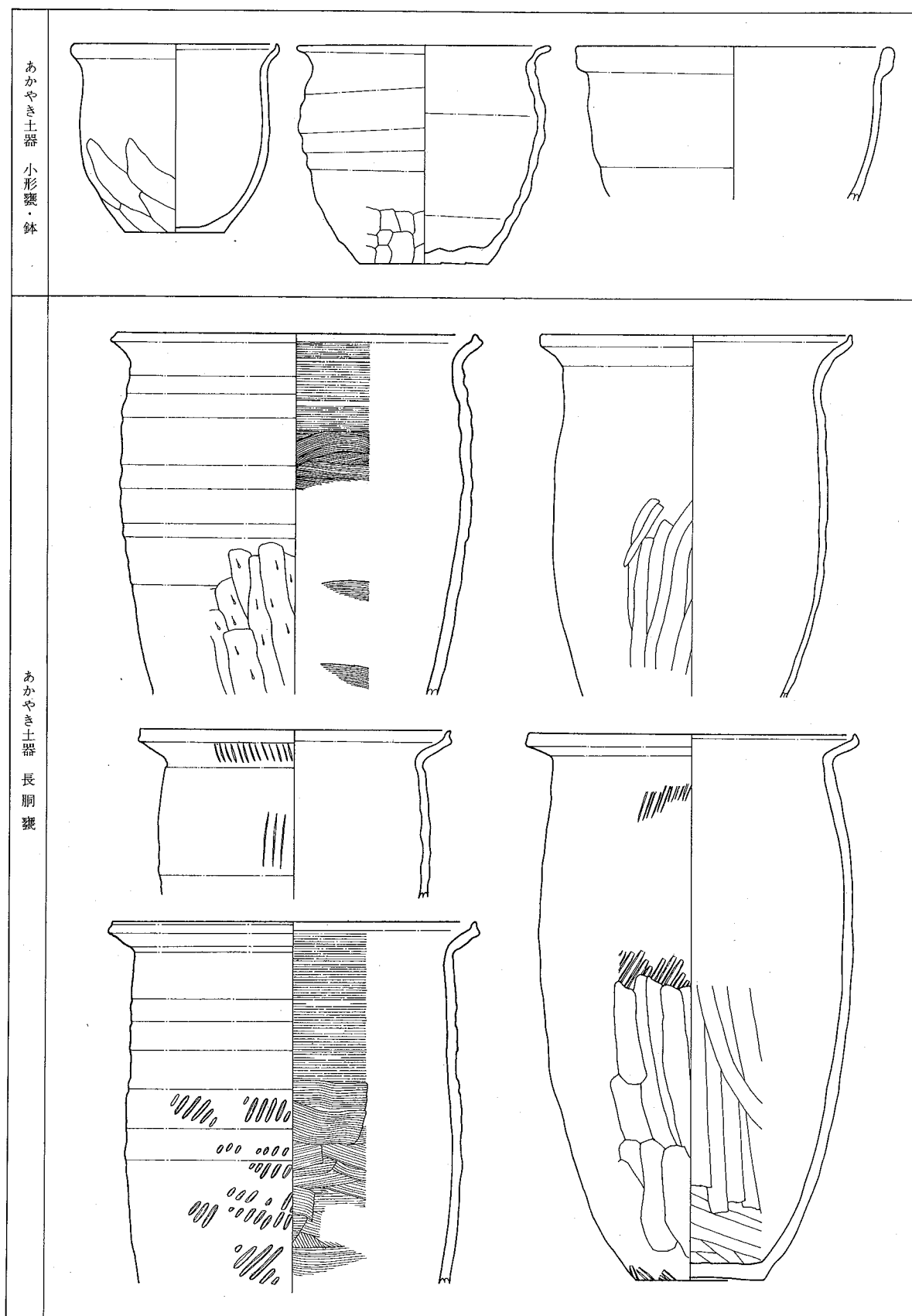
本遺跡出土の土器群は、概ね以上の通りである。そしてこれらの土器群にどの程度の時間幅を考えることができるのかということについて考えてみたい。

共存する土器群

土器群の中で上限を求めるとするなら、ひとつはロクロ未使用の土師器環であろう。明瞭な段を有しないこの丸底の環は、宮城県でいう国分寺下層式に相当するもので、8世紀後半に位置づけられている。ところで前述したように、これらの環のほとんどが、城柵築営中、もしくはそれ以前の遺構、施設から出土しており、築営後に使用されていたとは考えにくいのである。またへら切りの須恵器環も上限を考える上で参考となるが、再調整技法など糸切りのものとほとんど変わりなく、へら切りと糸切りとが共存していたと考えるべきであろう。たしかに糸切りは環C類にのみ確認され、新しい要素ともいえるが、多くはへら切りと共伴している。さらに無調整のものと再調整を施すものとも、器形が同じであり共存していたと考えられる。あかやき土器環やロクロ成形の土師器環についても、基本的には共存していたとみてさしつかえないであろう。他の環類も数点しかない台付盤を除けば相似る形状、技法である。

甕類についても、個別的には口縁部形状と調整技法との組みあわせに明らかな一線はなく共存の可能性が高い。ただし須恵器、土師器、あかやき土器相互間に環のような相似性をみることができない。これは三者がそれぞれ独自の製作手法によっているためで、三者が共存していても矛盾はないであろう。この点については他遺跡との比較によって共存性をとらえていこうと思う。

このように本遺跡の土器群は、ロクロ未使用の土師器環を除けば相互に共存している可能性が高い。なお基本的には、その出土状態から共存性を検討すべきであるが、少なくとも第3～17次調査では、方八丁土器群の共存性を否定する資料は何もない。



第42図 志波城跡出土あかやき土器甕類

(3) 胆沢城跡の土器様相

胆沢城跡創建期の土器様相

胆沢城は802年の造営である。この胆沢城跡の発掘調査は1974年から年次計画で進められ、多くの成果が呈示されている。そして外郭線の追求の中で、9世紀代は2期の遺構変遷をもつことが指摘されてきた(1977水沢市教委)。まず創建期であるI(A₁)期は、門、やぐら、築地、築地内側の地割溝(南門部では築地外側にもみられる)などの外郭遺構があり、II(A₂)期には地割溝が埋められ、新たに門ややぐらの外側で張り出す大溝が掘削されている。調査者の伊藤博幸氏らは、I(A₁)期を9世紀初～中葉、II(A₂)期を9世紀後半に位置づけている。

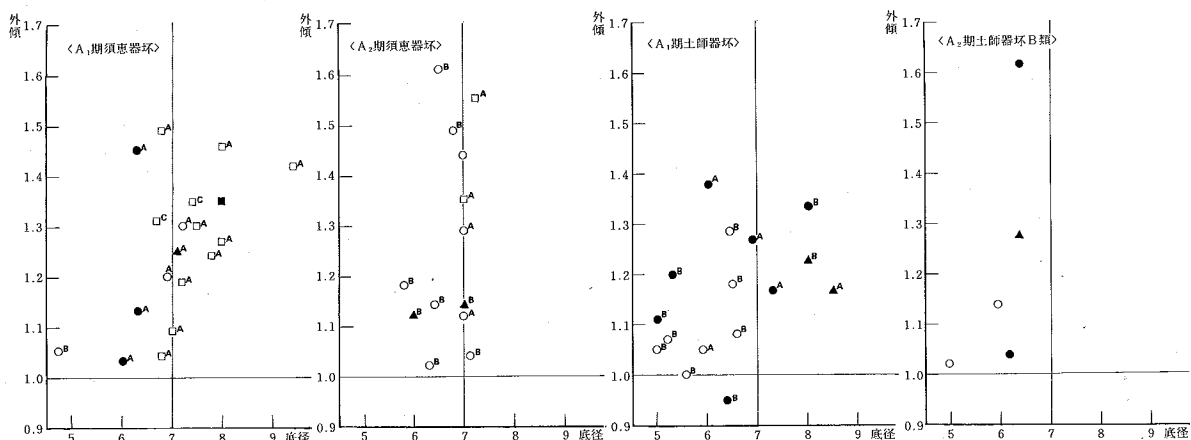
本稿では、遺構変遷の位置づけが明確なI(A₁)期の地割溝とII(A₂)期の大溝から出土した土器をとりあげて比較資料としたい。なお胆沢城創建期には、あかやき土器の坏類はない。

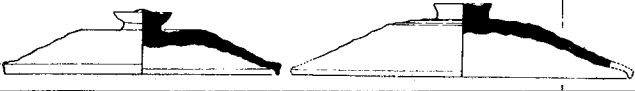

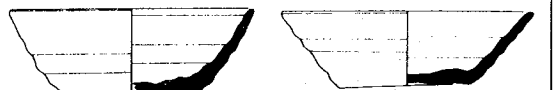











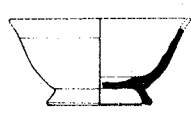









須恵器坏

まず須恵器坏であるが、I(A₁)期は底部から口縁部まで直線的にたちあがるA類が多く、また内湾するB類は例外的となる。底径は6～8cmにほぼまとまっている。外傾度の強いもの(1.6～2.0)はほとんどなく、中小程度のもの(1.0～1.5)が主体を占める。底部の切離しは、ヘラ切りがほとんどで、糸切りは少ない。体部下端から底面にかけての再調整は、3割程度で多くはない。手持、回転ヘラケズリは同数である。II(A₂)期になると、内湾気味のB類が主体を占めるようになりA類は減少する。また底径も7cmをこえるものは消滅してしまう。底部切離しも、ヘラ切りは1点のみで、ほとんど糸切りとなる。再調整を施すものも稀となってしまう。

他の須恵器坏類では、台付坏(稜碗)はI(A₁)期に1点みられ、体部下半に稜をもち、上半が外反する器形である。蓋もA₁期にみられ、すべて宝珠様のつまみをもつが肩が明瞭なものと不明瞭なものがある。盃、台付盤に相当する器種はI(A₁)、II(A₂)期ともに出土していない。

第14表 胆沢城跡出土坏類



	A ₁ 期 (9世紀前半)	A ₂ 期 (9世紀後半)
蓋		
坏 A 類		
		
		
B 類		
C 類		
碗		
稜 碗		
台付皿		
坏 A 類		
		
坏 B 類		
		
盤・碗		

第43図 胆沢城跡出土坏類 (1 : 4)

土師器坏

土師器坏はⅠ(A₁)、Ⅱ(A₂)期を通して内湾気味のB類がほとんどでⅡ(A₂)期はB類ばかりとなる。底径はⅠ(A₁)期が5~8.5cm、Ⅱ(A₂)期が5~6.5cmと小径化する。底部切離しもヘラ切り1点のみで、ほとんど糸切りである。再調整では、Ⅰ(A₁)期に糸切り後、回転ヘラケズリするものがほぼ半数みられ、手持ちヘラケズリは多くない。Ⅱ(A₂)期になると糸切り無調整がやや多くなる。なお層位的に検討の余地を残すが、ロクロ未使用の坏もみられる。

土師器甕類

土師器甕類は、ロクロを使用しない“7VATタイプ”のものがあるが、全器形を復原しうる資料はまだない*。この甕はⅠ(A₁)期にのみみられるものでⅡ(A₂)期では消滅してしまう。口縁部内外をヨコナデし、体部外面をヘラケズリするもので、頸部に段を有するものと体部からゆるやかに外反するものがある。

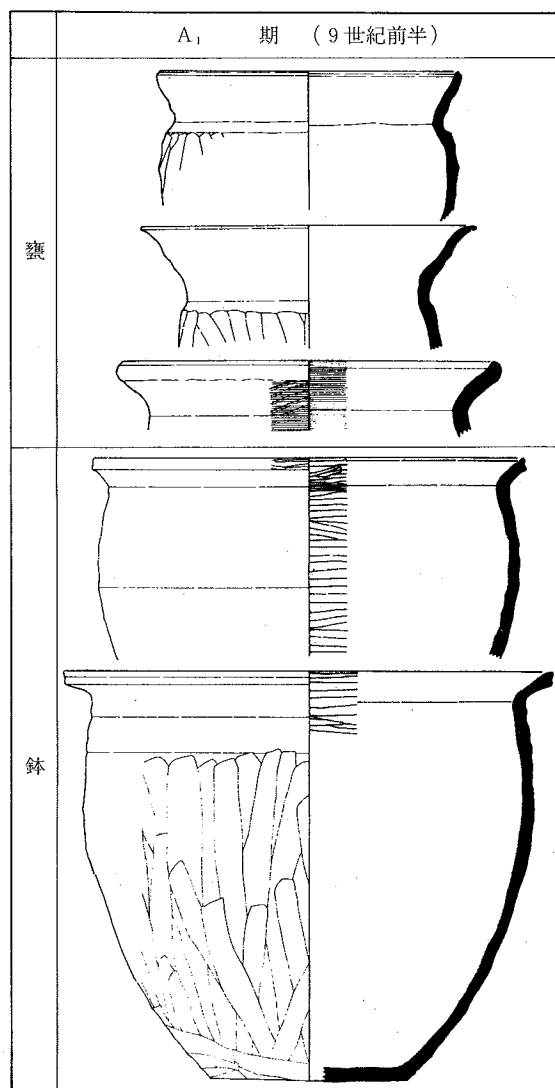
また、内面をヘラミガキし、黒色処理する鉢がある。これはロクロ成形で、外面はヘラケズリのものもみられる。

須恵器甕類

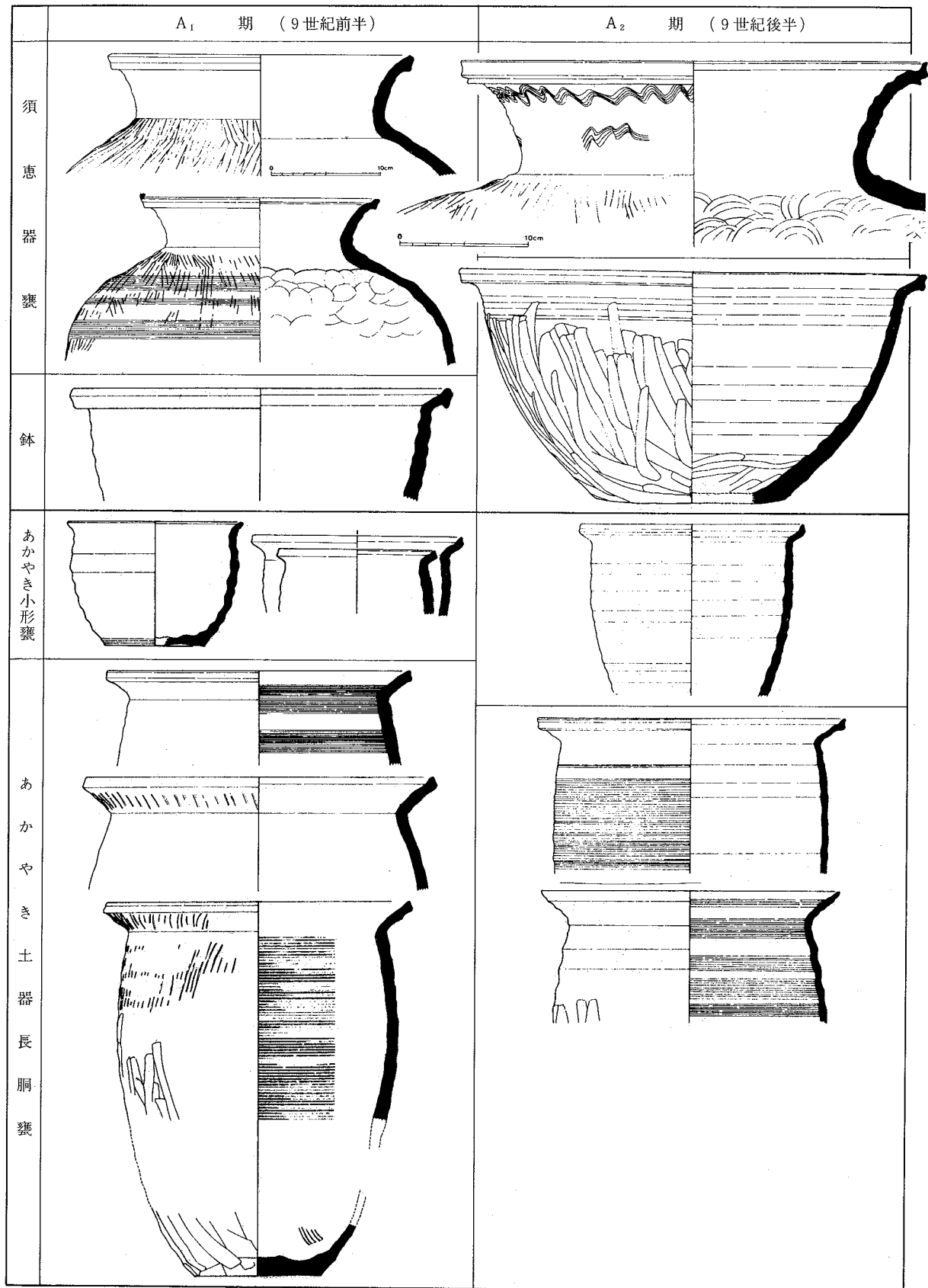
須恵器甕類は、胴部がまるく張り、口頸部がしまり、外反する口縁端部が上方に挽きだされる器形である。タタキ工具は平行、アテ工具は同心円(円筒形工具の円形端部をあてるもの)、青海波などがある。口縁部外面に波状櫛描文が施されるものもみられる。Ⅰ(A₁)・Ⅱ(A₂)期の差はよくわからない。

さらに報告者が須恵器甕として扱っている長胴の甕は、瀬谷子窯跡に出土例があり、色調は白橙色~赤橙色を呈する還元炎焼成のものであるが、その成形や調整は前述のあかやき土器甕と共通している。この長胴甕は、基本的に輪づみ→タタキ→ロクロ成形→

* 伊藤博幸氏らのいう“7VATタイプ”を和訳すると、“奈良時代の跡呂井式”である。しかしロクロ未使用だけではなく、非使用の土師器をも含める名詞としては考古学用語上不適切である。



第44図 胆沢城跡出土土師器甕類(1:4)



第45図 胆沢城跡出土甕類 (1 : 4)

VI 志波城跡をめぐる諸問題

体部外面ヘラケズリ、体部内面カキメ・ヘラナデ・ナデツケという工程でつくられるものである。タタキ成形はⅠ(A₁)期に限られ、Ⅱ(A₂)期にこの手法は消滅してしまう。

このほかに小形甕や鉢がある。内面無調整で、体部外面をロクロナデのままあるいはヘラケズリするものである。底部切離ははっきりしない。これらはタタキ成形でなく、Ⅰ・Ⅱ期の差は判然としていない。

胆沢城跡と志波城跡の土器様相の比較

坏類の比較

この胆沢城跡出土土器群と志波城跡出土土器群の時間的關係にふれておきたい。まず坏類であるが、志波城跡出土の須恵器坏は、A類が多く、底径が7cmをこえるものがほとんどであること、ヘラ切が多いが糸切も含まれること、体部下端から底部にかけて再調整を施すものが多いこと、などの特徴がある。胆沢城跡の須恵器と比較すると、Ⅰ(A₁)期の様相に類似している。Ⅱ(A₂)期の須恵器は、B類主体で底径7cm以下、糸切無調整が主流を占めており、志波城跡のものとは明らかな相違を示している。ただ志波城跡の方が外傾度きつく、A類がほとんど7cm以上の底径であることは、胆沢城Ⅰ(A₁)期よりやや古い様相をもっている。

土師器坏は、志波城跡が、底径7cmをこえ、A・B類が混在し、ヘラ切があり、ほとんど再調整されている。これに対し、胆沢城Ⅰ(A₁)期のものは、7cm以下のB類が多く、ほとんど糸切で、無調整のものもあり、Ⅱ(A₂)期には底径の小径化、B類の主流化がより進んでいる。つまり、土師器坏は、強いて共通性をみいだすなら、Ⅰ(A₁)期に近いが、志波城跡の土師器坏が須恵器坏に器形的に共通しており、かなり相違がみられる。地域差あるいは時間差が考えられようが、器形変遷上、志波城跡の方が、やや古いといえよう。他の坏類は比較しうる資料が僅少である。

甕類の比較

一方甕類は、ロクロ非使用の土師器が志波・胆沢両者にみられる。胆沢城Ⅱ(A₂)期にはこのロクロ非使用のものは消滅する。志波城跡周辺では、後述するように新しい時期まで存続するが、志波城跡には口縁部が短かく外反するものではなく、胆沢城Ⅰ(A₁)期の器形に共通している。ロクロ使用のあかやき土器甕も、Ⅰ(A₁)期のものに類似する。ただし、タタキ成形が胆沢城Ⅱ(A₂)期で消滅するのに対し、志波城跡周辺では、やはり新しい段階まで残存しており、若干の差異がみとめられる。

このように、志波城跡出土の土器群は、胆沢城跡のⅠ(A₁)期に類似しており、胆沢城創建の9世紀前半の年代が与えられ、また文献にみえる志波城造営の9世紀初頭という年代とも一致するのである。

ところで、いくつかの問題も提起された。ひとつは、坏類では志波城跡の方がやや古いのではないかという問題である。しかし、胆沢・志波両者の前段階と考えられているのは土師器ではロクロ未使用の段階であり、須恵器坏では底径が大きくヘラ切無調整の段階である。志波城がこの段階にまでさかのぼることはありえない。したがって現時点では両者の土器群は同一型式として扱われるべきであろう。ただ仮説としては、土器群の年代幅の差を考えることができると思われる。胆沢城Ⅰ(A₁)期の年代幅と志波城の年代幅の差、つまり志波城存続が9世紀初頭に限定されるのではないかと思われるのである。

問題の二点めとして、胆沢城跡と志波城跡周辺の地域性についてである。特にロクロ非使用の土師器甕類とあかやき土器甕類のタタキ成形の存続は、後述するように2型式の時間差がみられる。そして新しい段階のロクロ非使用の甕は口縁部が短かく外反し、胆沢・志波二者の甕と異なっている。これは、土器生産が胆沢・志波両城の創建期ではほぼ同じように行われ、9世紀後半以降それぞれの地域で独自の土器生産が展開されるようになったためと考えられる。

また、あかやき土器では、甕類が両者一致するも、坏類は胆沢城にみられず、異なった土器組成を示している。これは胆沢城跡周辺の「土師質土器」の出現前に志波城のあかやき土器が生産流通していたことになり、あかやき土器の出自にも関連するものと思われる。

(4) 志波城跡周辺の土器様相

志波城跡周辺の古代遺跡の発掘調査は多くなく、資料の集積はまだ不十分である。その中で比較的まとまった資料を提供している杉ノ上遺跡群と百目木・林崎遺跡の土器様相をみてみよう。

杉ノ上遺跡群

杉ノ上遺跡群は、徳丹城の南約4.5kmにあり、北上川西側の中位段丘上に立地する。この中位段丘上は西からの北上川支流によって解析され、景観上いくつかの段丘に分断されている。その段丘ごとに古代の遺跡が分布しており、東北新幹線建設に先立つ調査によって杉ノ上Ⅰ～Ⅲ遺跡で竪穴住居跡などが確認されている。本項では竪穴住居単位の土器様相を様式別に概観する。

〈第1様式〉Ⅱ-B J 56住居跡。坏類では、口縁部外反し糸切無調整の土師器坏と体部が直線的にたちあがるヘラ切無調整あるいはヘラ切底面周縁を手持ヘラケズリする須恵器坏とが共伴している。須恵器坏は外傾がゆるやかで底径も7cmをこえない。甕類では須恵器の甕が4点あり、うち3点は丸底で口唇部が上下に挽きだされ、体部上半に最大径をもつもので、体部外面に平行・格子のタタキ目、内面に同心円文、青海波、蓮藕文れんぐうもんのあて工具痕がみえる。あかやき土器はロクロ成形の口縁部に最大径を有する長胴甕で、口唇部下半の挽きだしは強くなく、体部外面下半をヘラケズリ、内面をカキメで調整している。

杉ノ上第1様式

この住居跡出土土器は志波城跡出土のそれに共通するものである。

〈第2様式〉Ⅱ-G B 03住居跡。坏類では糸切無調整の土師器坏とあかやき土器坏とが共伴する。甕類では、外面ヘラケズリ内面ヘラナデ調整のあるロクロ非使用の土師器とロクロ成形で糸切のあかやき土器が共存している。

杉ノ上第2様式

〈第3様式〉Ⅲ-E B 50・E D 03住居跡。坏類では、糸切無調整が大部分で1点のみ手持ヘラケズリするあかやき土器坏があり、土師器坏や須恵器坏がわずかながら共伴する。甕類はロクロ成形のあかやき土器が主体を占め、長胴甕・小形甕をとおして口唇部が上方に挽きだされ、小形甕では糸切無調整が一般的である。ロクロ非使用の土師器はみられない。

杉ノ上第3様式

杉ノ上第4様式 〈第4様式〉II-GD50・III-ED50住居跡。坏類はすべて糸切無調整のあかやき土器坏で、口縁部外反するものが多い。甕類もあかやき土器甕が主体を占め、口縁の外方への屈曲は小さくなる。ロクロ非使用の口縁が短かく外反する土師器甕も出土している。

I-CA59住居跡。坏類はほとんど糸切無調整のあかやき土器皿である。器形は体部下端が凹み、体部から口縁部にかけて直線的に外反する特徴をもっている。わずかに共伴する土師器皿もほぼ同じ器形である。なお甕類の出土はない。新しい要素もあるが一応第4様式としておきたい。

以上、杉ノ上遺跡群検出の竪穴住居跡出土資料を概観してきたが、遺物量は少なく、それぞれの特徴を明確にしがたい。そこで比較的出土量が多く、各様式に比定できる遺跡の資料をみてみる。

杉ノ上窯跡

杉ノ上遺跡群に含まれ、中位段丘の比高5mの東側斜面にある。菅野義之助氏らにより注意されていたが*、先年斜面を切る小農道の開削により窯体の一部と思われる焼土や窯壁の破片が露出し、2基以上の穴窯の存在が推定された。ここに紹介する資料は灰原およびその周辺の表面採集によるものである**ただし第46図は小片からの図上復元で法量は正確といいがたい。

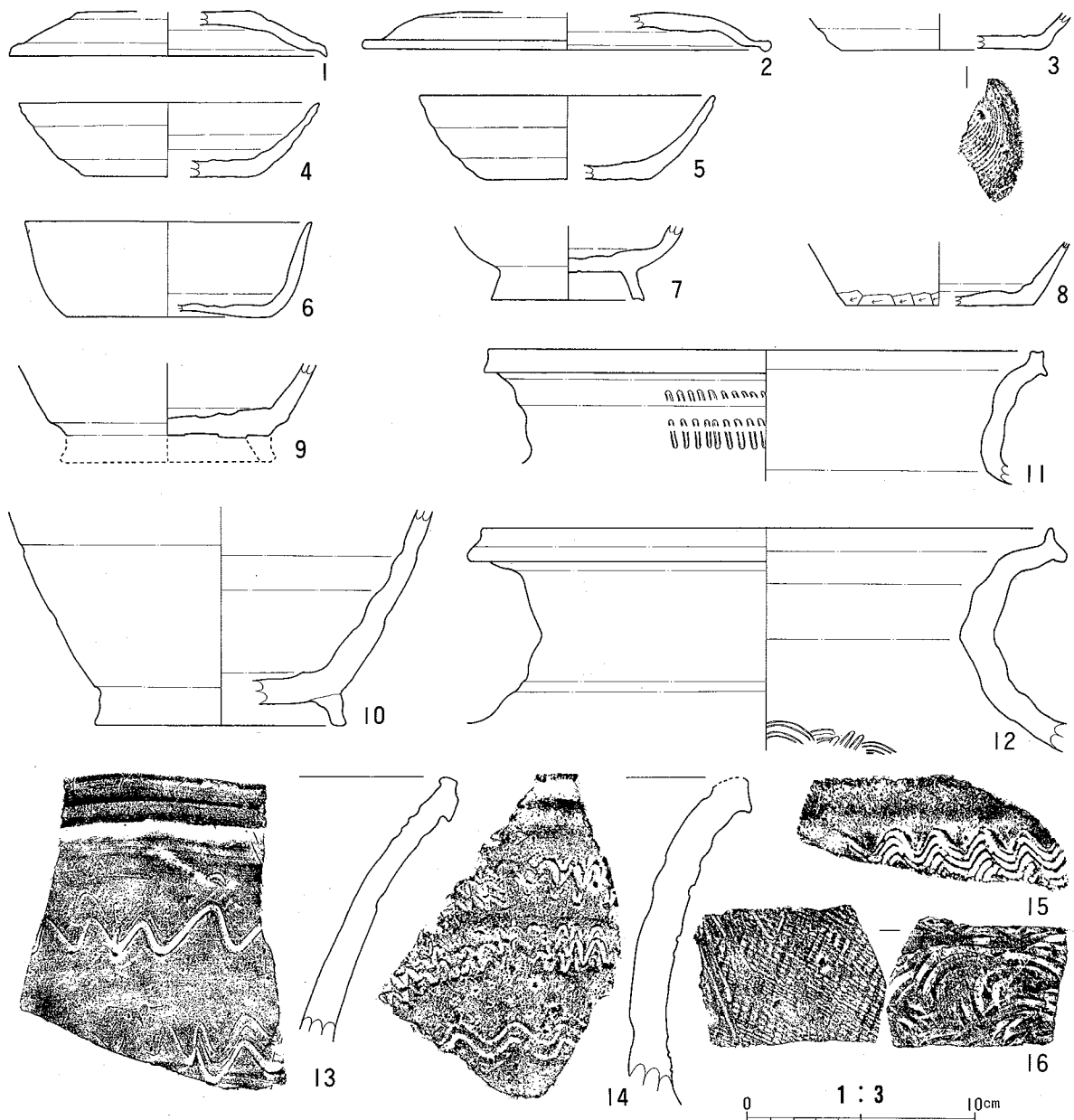
杉ノ上窯の坏類 1・2は蓋で、1の口縁部の屈曲が小さいもので、飴釉のような自然釉が、かさね焼きにより環状に付着する。2は天井部を回転ヘラケズリするもので、外面にうすく自然釉がかかっている。3～6は坏である。3は体部が黄橙色で底部が灰白色を呈し、底部切離しは糸切無調整である。この色調と糸切は表採品の中で唯一の例である。4・5はヘラ切無調整でやや厚手で、底径が大きい。6もヘラ切無調整で、窯壁の一部が崩れ融着しており、かなり変形している。4と6は自然釉がかかり、5は火だすきが残っている。共にくすべ色である。7は橙色系を呈する高台付塊で、全体に丸味をもち、高台をつけた後もヘラケズリせず、ロクロナデしているだけである。

杉ノ上窯の甕類 8は小形甕の底部で、体部下端から底面全面を手持ケズリしている。9も小形甕の底部で、底面はヘラ切無調整で、わずかにロクロナデにつけられた高台ははがれてしまっている。8・9は灰白色を呈する。10は瓶～甕の底部で、高台を付す。高台をつけた後ロクロナデで整えているだけである。体部内面以外は自然釉が比較的厚くかかっている。11・12は甕の口縁部で、11の頸部外面に平行タタキ、12の体部外面は自然釉のためはっきりしないが、体部内面に青海波・平行アテ工具痕が観察される。13～15は甕の口縁部で、波状の櫛描文がみられる。15は頸部である。16は外面格子目タタキ、内面青海波アテ工具痕である。

このほか、平行タタキはみられるが蓮藕文^{れんぐうもん}は確認されていない。

* 1936菅野義之助「郷土に於ける『日本研究』の近状(3)——特に陸奥移民開拓史の概要と志波城址を推定する迄の仕方に就いて」『史潮』6巻2号。

** 一部相原康二・八重樫良宏氏らの採集品と実測図もあわせて、両氏のご好意により報告する。



第46図 杉ノ上窯跡採集須恵器

なおこれらの須恵器は全般に焼成が良好で、やや焼きのあまい志波城跡や徳丹城跡のものとは異なっている。

上平沢新田遺跡

杉ノ上窯跡の西南西約4kmの中位段丘上に立地する。東北自動車道建設に先立つ岩手県教育委員会の調査により、平安期の11棟の竪穴住居跡などが調査された(1980岩手県教委)。このうち、ヘラ切須恵器坏を伴出する住居跡は1・2号である。

1号住居跡では、須恵器坏14点のうちヘラ切無調整が3点、糸切無調整が11点、器形は、共に体部下半が湾曲しながら直線的にたちあがるもの、あるいは口縁外反する例が多い。また底径も7cmをこえない。これらと共に糸切の台付堦がみられる。ロクロ非使用の土師

1号住居跡

VI 志波城跡をめぐる諸問題

器甕は頸部に段をもたずに口縁外反するものである。ロクロ成形のあかやき土器小形甕は底部糸切無調整のものである。須恵器長頸瓶は球形の体部と長頸部を単純につなぎあわせている。甕は平行タタキと青海波アテ工具で成形されたものである。

2号住居跡

2号住居跡は、ヘラ切無調整で体部が直線的にたちあがり、底径が7 cmに近いものである。ロクロ非使用の甕は、頸部に段をもつもの、段をもたずに外反するもの、ゆるやかに外反するものがみられるが、口縁が短かく外反するものはない。

このように、2号住居跡出土土器は、志波城跡に近い内容であり、1号住居跡は明らかに志波城以後のものであり、次のべる百目木遺跡の土器様相との中間に位置するものであろう。また土師器やあかやき土器環がほとんどみられず、須恵器が使用されていることは、杉ノ上窯も含め、在地生産によって供給されていたと思われる。

百目木遺跡

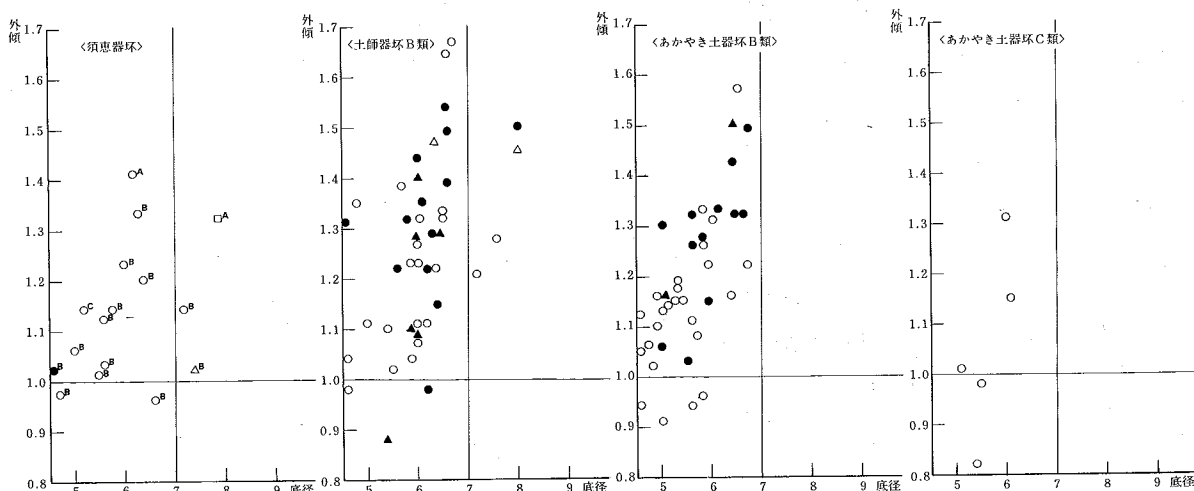
志波城跡の南東約5 kmに位置し、北上川と雫石川の旧河道で形成された沖積微高地上に立地する。都南村教育委員会の調査により80棟の竪穴住居跡が検出された(1979都南村教委)。この住居跡群は概ね2期にわかれ、1期は土師器製作にロクロを使用しない国分寺下層式に併行する38棟、2期は土器様相がほぼ単一な33棟でロクロ成形が普及している段階のものである。本稿でのべるのは2期の土器様相で、前述の杉ノ上遺跡群第2様式に比定できると考えられる。

坏類

坏類は、須恵器・土師器・あかやき土器の比が1:3:3と、土師器とあかやき土器の占有はほぼ同率である。須恵器坏は1点が再調整されるほかは糸切無調整で、底径は7 cmをこえるものは少なく、また器形も口縁部が内湾気味のB類がほとんどである。土師器坏はすべてB類の器形で、ほぼ半数が再調整されている。底部切離技法はヘラ切がみられずすべて糸切と考えられる。底径が7 cmをこえるものは少ない。あかやき土器坏もB類が主体を占め、口縁部外反するC類が若干みられる。糸切であるが、B類の坏の3分の1に再調整がみとめられる。やはり底径が7 cmをこえるものはない。

高台付坏は、点数は少ないが土師器に限られ、口縁外反する器形が多く、1点は内外と

第15表 百目木遺跡出土坏類



も黒色処理されている。

甕類は、ロクロ非使用のものが7割を占め、残り3割をロクロ成形のものが占める。ロクロを使用しない土師器は小形甕（器高12～20cm口径12～15cm）と長胴甕（器高25～40cm口径15～27cm）、それに胴張甕とにわかれるが、その8割は長胴甕である。長胴甕の口縁部は短かく外反するものが大半で、次いで頸部に段をもたずに外反するものがみられ、そして後者が口径15～20cmのものに限定されるのに対し、前者は17cm以上特に20cm以上の大きな器形と強い相関関係がある。頸部に段をもつ口縁部はほとんどみられない。

ロクロ成形のあかやき土器も3器種にわかれるが、小形甕が約半数を占め、長胴甕は少ない。タタキ成形は鍋（鉢）以外にはみられない。口縁部形状は、上方に挽きだされるもの、単純に外反するものが多く、口唇部が直口となるものがそれらに次ぐ。この点でロクロ成形と非使用の甕類に共通性はみとめられず、製作者そのもののちがいを認めざるを得ないであろう。

林崎遺跡

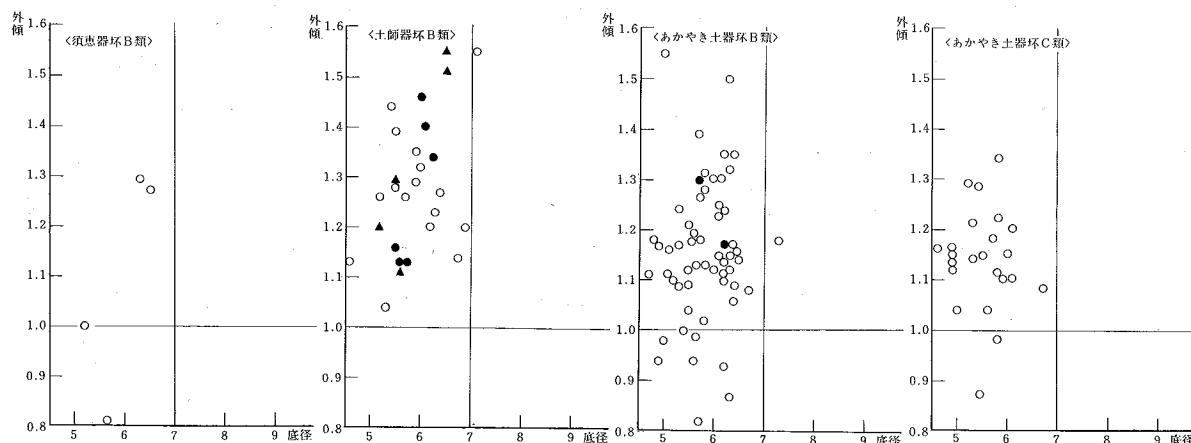
林崎遺跡については本報告書でも記述してきたとおりである。本遺跡資料は杉ノ上遺跡群第3様式に比定できよう。

坏類は、須恵器・土師器・あかやき土器の比が1：7：20と、百目木遺跡に比して須恵器の減少とあかやき土器の増加が特徴的である。須恵器坏はB類のみとなり、すべて糸切無調整である。外傾もゆるやかとなる。土師器坏もB類の糸切で、再調整のものは3分の1強と少なくなる。増加したあかやき土器坏は口縁部外反のC類が増え、すべて糸切で、一部に底部再調整を残すも無調整が一般的である。

甕類は量的に少ないが、さまざまな器種がある。長胴甕・小形甕のほか、灰釉陶器を模した多嘴瓶、鉄鉢形の台付鉢、須恵器に多い広口壺など、土器製作が広範に展開されている。この中で非使用の土師器甕は一点のみで、他はすべてロクロ成形によるあかやき土器である。長胴甕の中にはタタキ成形のものもみられる。

なお第4様式以後の土器群については、まとまった資料がなく、今後の調査に期待したい。

第16表 林崎遺跡出土坏類



(5) 盛岡周辺の平安時代土器の変遷

以上のべたように、杉ノ上遺跡群で少なくとも4様式の土器様相が観察されるのであるが、この4様式はそれぞれ時期差をもって変遷する。それは遺構の新旧関係と共に次の点でそれぞれがほぼ矛盾なく推移すると考えられるからである。

1. 土器群の中であかやき土器が増加する。
2. 坏類の底径の小形化、口縁部の外反化と共に器高が低くなり、皿化する。
3. ロクロ成形の土器の底部切離はヘラ切から糸切へ、再調整から無調整へ移行する。
4. 土師器甕類の頸部が無段化し、口縁部の外反が小形化する。

そして各期の類例が盛岡周辺で増加してきており、杉ノ上遺跡群での変遷を盛岡周辺にも一般的にあてはめることが可能と考えられる。

(6) おわりに

志波城建置以降の土器様相の変遷は、いわばあかやき土器の普及の過程である。その初源は志波城期の9世紀初頭であり、次第に須恵器・土師器の比率が減少し、ついにはあかやき土器一色となるのである。

あかやき土器の 概念

ところで、あかやき土器そのものの概念は研究者の間でも統一をみていない。すでにのべたが本稿では、酸化焰焼成される土器のうち坏類は内面無調整のロクロ成形のもの、甕類はロクロ成形のものをあかやき土器と理解した。坏類のあかやき土器の認識はほとんど異論ないものと思われるが、甕類については酸化焰焼成のものすべてを土師器ととらえるのが一般的である。しかしそのとらえ方には、あかやき土器製作者が坏類のみを生産し、甕類の生産をしなかったという前提が必要である。けれどもたとえば酸化焰焼成の多嘴瓶などの器形やタタキ成形の長胴甕などの技法は、灰釉陶器や須恵器と共通する。これは成形技法の面で須恵器と共通し、酸化焰焼成という点で土師器と共通するあかやき土器坏類と同じ構造である。またロクロ成形甕とロクロ非使用甕とは長期間の共存があり、製作者の相違があると考えられる。したがって甕類を生産しないという前提は成立しないであろう。むしろ色調やかたさで似る内面無調整の坏類とロクロ成形の甕類を、共にあかやき土器と理解すべきであろう。

あかやき土器の 特徴

あかやき土器の特徴は、坏類でみると、土師器のような内面調整を施さず、短時間に大量の土器を成形することができ、なおかつ須恵器ほどの焼成技術は必要なく、まさにいくらかでも量産可能な土器といえよう。また甕類も内面調整を次第に簡素化し、一番大きな器種である長胴甕をたたきしめたりしてより堅固に、ロクロ成形でより整美な土器にしようとしている。さらに器形的には、土師器的な長胴甕や小形甕、須恵器的な坏類や広口壺、灰釉陶器模倣の多嘴瓶、そして鉄鉢様の鉢など、さまざまな器種を吸収している。すなわち、あかやき土器は量産性と器形の多様性（堅固で整美という面も加え）に重点をおいた合理的な土器といえよう。

第17表 盛岡周辺における平安時代土器の変遷

	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期
須恵器	坏類=大量 A類主体 底径7cm以上が多い 糸切・ヘラ切・再調整・ 無調整が共存 ヘラ切大部分(C類に糸 切多い) 甕類=格子, 平行, 青海波, 蓮藕タタキ	坏類=減少 B類主体 底径7cm以下 糸切無調整(ヘラ切わず かに残存) 甕類=平行, 青海波タタキ	坏類=激減 B類主体 糸切無調整のみ 甕類=激減, 平行タタキ	坏類=激減~消滅
土師器	坏類=少量? A類・B類共存 底径7cm以上が大部分 ヘラ切・糸切共存, 再調 整のもの多い 甕類=減少 頸部に段あるもの(A類) 多くD類稀 ハケメ少なくヘラナデ主 体	坏類=あかやきと同量 B類主体 底径7cm以下 糸切で再調整と無調整共 存(半々ずつ) 甕類=減少 A類ほとんどなくなりB ・D類主体	坏類=減少 B類主体 糸切で再調整と無調整 共存(無調整%) 甕類=減少	坏類=激減 糸切無調整のみ 甕類=残存?
あかやき土器	坏類=須恵器と同じ内容 (集落出土は不明) 甕類=タタキ成形(平行タ タキ, あて工具なし)	坏類=増加 B類主体 底径7cm以下 糸切無調整多いが再調整 も共存 甕類=タタキ成形減少	坏類=さらに増加 B類多いがC類増加 糸切無調整(一部に再 調整残す) 甕類=増加, 器種も増え る, タタキ残存? 内面調整省略化	坏類=主体化する 口縁外反(C類)が一 般的 糸切無調整のみ 甕類=口縁外反短かくゆ るやか
遺跡 (住居址)	志波城跡 古館駅前(BA50) 杉ノ上II(BJ56) 上平沢(2)	百目木2期 館(RA01~11) 田頭(BC12) 下羽場(1・10) 上平沢(1・3号)	林崎 下赤林I 杉ノ上III(EB50) 上平沢(6~11号)	杉ノ上II(GD50) 杉ノ上III(ED50) 杉ノ上I(CA59)
備考	9世紀前半 須恵器は在地生産	9世紀後半か ヘラ切須恵器坏伴う例はや や古いか	10世紀~ 須恵器の在地生産停止	須恵器の供給はない?

VI 志波城跡をめぐる諸問題

あかやき土器の普及

あかやき土器の出現は志波城造営期である。志波城の造営がおそらく急務であったこと、また造営後安定する間もなく移転せざるを得なかったことを考えるならば、須恵器や土師器より量産可能で、しかも須恵器や土師器を補完する形であかやき土器が出現したことはきわめて合理的である。そして志波城移転後あかやき土器が普及していくのも、その合理性の故であろう。

その背景には須恵器の在地生産の停滞が一因と考えられる。盛岡周辺の須恵器窯跡は、ほかに2・3の伝承を除けば前述の杉ノ上窯跡の存在が現在確認されるだけである。杉ノ上窯跡は9世紀前半を中心とする窯跡であり、ここが直接志波城や徳丹城に供給しないとしても、9世紀前半の比較的豊富な須恵器は在地でまかなえたであろう。そして次第に須恵器の量が減少してくるのであるが、これは在地生産の減少あるいは停滞のためであろう。つまり盛岡周辺での須恵器生産はほぼ9世紀代に限られると考えられ、これと反比例するように、あかやき土器が台頭してくるのである。

しかし、次第に隆盛するあかやき土器であるが、その生産地、工房、生産者（集団）などについてはまったくわかっていない。想定されるのは、須恵器の製作者＝専門工人の一部が、本来の焼成技術をはなれて、新たな土器生産を開始したということである。今後、あかやき土器の生産址の追求と須恵器窯跡出土土器の再検討が必要であろう。

（八木光則）

参考文献（本文引用のみ）

・志波城跡

1977岩手県教育委員会『太田方八丁遺跡第1回現地説明会資料』

1977岩手県教育委員会『太田方八丁遺跡第3回現地説明会資料』

1977岩手県教育委員会『太田方八丁遺跡第4回現地説明会資料』

『方八丁概報77』、『方八丁概報78』、『方八丁概報79』

・胆沢城跡

1975水沢市教育委員会（伊藤博幸他編）『胆沢城跡——昭和49年度発掘調査概報』

1976水沢市教育委員会（伊藤博幸他編）『胆沢城跡——昭和50年度発掘調査概報』

1977水沢市教育委員会（伊藤博幸他編）『胆沢城跡——昭和51年度発掘調査概報』

1978水沢市教育委員会（伊藤博幸他編）『胆沢城跡——昭和52年度発掘調査概報』

・杉ノ上遺跡群

1979岩手県教育委員会（朴沢正耕編）「杉ノ上Ⅲ遺跡」・（佐々木勝編）「杉ノ上Ⅱ遺跡」・（鈴木隆英編）「杉ノ上Ⅰ遺跡」『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ

・上平沢新田遺跡

1980岩手県教育委員会（吉田努編）「上平沢新田遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書』Ⅲ

・百目木遺跡

1979都南村教育委員会（佐藤和男編）『百目木遺跡』